

# 日本語・韓国語間のバイリンガリズムとコード・スイッチング

朴 良順

## 1. はじめに

日本語と韓国語<sup>1</sup>間のバイリンガリズム研究は、時代からみると第二次大戦の植民地時代のバイリンガリズム研究（熊谷 1997）と、現代の在日コリアンの言語行動を対象としたバイリンガリズム研究（生越 1983、任 1993 など）に分けられる。

在日コリアンの研究は、厳密に言うとは、韓国系の在日コリアンと総聯系の在日コリアンの領域に分かれる。さらに、韓国系の在日コリアンのうち、植民地時代前後に来日し、永住している在日コリアン 1 世とその子孫、いわゆる「オールドカマー」と、近年、ビジネス・結婚・留学で来日した韓国人とその家族、いわゆる「ニューカマー」に分けられる。

また、第 2 言語習得の観点からは、オールドカマーとも、臨界期が過ぎた時期から日本語を学習した韓国人留学生（郭 2002）とも異なる、韓国人年少者の言語行動に注目した研究が少数ながら報告されている（朴 2003a・2003b、吉田 2004）。

以上を整理すると、日韓バイリンガリズムの研究の焦点は次の 4 つになる。

- (1) 植民地時代の朝鮮半島における日朝二言語による言語行動（以下、「植民地時代のバイリンガリズム」と称する。）
- (2) 植民地時代前後に来日し、在日コリアン 1 世から 2 世以降の永住者の日韓二言語による言語行動（以下、「在日コリアンのバイリンガリズム」と称する。）
- (3) 近年、留学の目的で来日し、大学などで在学している韓国人留学生の日韓二言語による言語行動（以下、「滞日韓国人留学生のバイリンガリズム」と称する。）
- (4) 近年、ビジネスなどの親の都合で、滞日している中高生<sup>2</sup>における二言語による言語行動（以下、「滞日韓国人中高生のバイリンガリズム」と称する。）

## 2. 研究の目的と意義

本稿では、「植民地時代のバイリンガリズム」、「在日コリアンのバイリンガリズム」、「滞日韓国人留学生のバイリンガリズム」、「滞日韓国人中高生のバイリンガリズム」における

---

<sup>1</sup> 本論文では、先行研究に従い、植民地時代の韓国語と総聯系在日コリアンの韓国語は「朝鮮語」と表記する。それ以外は、「韓国語」と通称する。

<sup>2</sup> ここでは、朴（2003a・2003b）、吉田（2004）のインフォーマントである韓国系民族学校に通っている中高生のことを指す。

日本語と韓国語間のコード・スイッチング（以下「CS」と略称する。）を対照、比較し、それぞれの相違点を明らかにする。その際、先行研究に例示された例文を再検討し、分析を行う。韓国語の表記においては、例文では、先行研究に従い、ハングルで表記するが、本文では Yale 式ローマ字表記を併記する。

このような研究方法は、日韓間のバイリンガリズムの考察において日本語と韓国語の言語形式による言語内的要因と、年齢・社会・時代などによる言語外的要因との関連を総合的に把握することを可能にする。また、成人と年少者のデータを比べることによって、年齢、滞日期间とバイリンガリズムとの関連を明らかにすることができる。

### 3. 日本語と韓国語間のコード・スイッチング研究

#### 3.1 植民地時代

植民地時代の日本語・朝鮮語の現象を扱った研究は、熊谷（1997）の研究がある。熊谷（1997）では、植民地時代及び 1948 年までの戦後の朝鮮語における日本語の影響を検討し、日本語の転移使用について分析した。ここでは、熊谷（1997）に、例示された植民地時代と戦後の文献からの例文を通じて、その時代のバイリンガリズムと日・朝間の CS 形式の特徴を明らかにする。

##### 3.1.1 植民地時代のバイリンガリズム

熊谷（1997）には、植民地時代に日本語の普及状況は、1942 年全人口の 1.5% に過ぎなかったのに対し、1944 年には 36% まで進んでいた、と記されている。この 35% 近い日本語普及率は、熊谷（1997）によると、各地方など民間側で設置した国語講習会員の 320 万名を合わせた数値である。わずか 2 年で 35% の伸張率を示しているが、ここでは日本語能力の不十分さが伺える。すなわち、不自由なく日本語でコミュニケーションが可能だった人は、1.5% 程度に止まっており、しかも熊谷（1997）によると、留学派・作家などの知識人が主流だったのである。

しかし、日本語レベルがそれほどではないとしても、植民地下の 35 年間朝鮮語における日本語の影響は大きかったため、解放された朝鮮では、朝鮮語から日本語を排斥する作業が行われ、朝鮮半島におけるバイリンガリズムは次第に朝鮮語のモノリンガル化された。

##### 3.1.2 植民地時代のコード・スイッチング

植民地下の朝鮮半島では、日本語を上位言語とする日本語・朝鮮語二言語併用社会を形成し、朝鮮語は日本語からの言語干渉を不断に受け続けた。そのため、日本語とのバイリンガルであった多くの朝鮮人は、朝鮮語で書いたり話したりする際にも、しばしば日本語を混淆させる言語生活を営んでいた。

このような植民地時代の日・朝バイリンガリズムは、もっぱら借用語レベルのCSであろうと予想される。熊谷（1997）には、植民地下朝鮮で刊行された朝鮮語出版物を対象として行った語彙調査の結果から、朝鮮語の中に日本語の発音のまま転移使用された日本語語彙（以下、「借音語」と略称する。）1,418語のうち体言が1,192語、用言が187語、形容動詞が27語であると記されている。

日本語用言が朝鮮語に転移使用されるにあたっては、「飽きる hata（日本語動詞+hata）」「うるさい hata（日本語形容詞+hata）」「あいまい hata（日本語形容動詞+hata）」のように、朝鮮語用言を形成する接尾語「hata」を伴う混種語を形成していた。この接尾語「hata」は、本来、名詞に後続するものだが、日本語動詞が転移使用される場合は、動詞の基本形に後続する場合が最も多く、次いで連用形が用いられる。熊谷（1997）の記述では、動詞の基本形は66例あったのに対し、連用形は21例に止まっていた。

本来、接尾語「hata」は、名詞に後続した用言を形成するものであることから、動詞の終止形に「hata」が後続した形は、朝鮮語の「hata」用言化規則に沿うものではない。そして、こうした日本語用言の「hata」用言化転移使用のパターンは、在日コリアンの研究（金1994、金1998・2001、黄1994）にも、滞日韓国人留学生の研究（郭2002）にも見られる形式であることから、日韓間CS特有の形式であると考えられる。

以下の例は、熊谷（1997）には提示されたものである。

- (例1) 차 한 잔을 **오**고<sub>hata</sub>를 **한** 것 (熊谷 1997)  
 (お茶 いっぱいを) (した こと)
- (例2) **오**치<sub>hata</sub>つ<sub>hata</sub>く 못 했다 (できなかつた) (熊谷 1997)
- (例3) 너무 **카**타<sub>hata</sub>く<sub>hata</sub>なる<sub>hata</sub>할 것 없이 (熊谷 1997)  
 (あまり) (することなく)
- (例4) **카**타<sub>hata</sub>む<sub>hata</sub>く<sub>hata</sub>하게 만들다 (させる) (熊谷 1997)
- (例5) 비밀을 **사**ぐ<sub>hata</sub>る<sub>hata</sub>하<sub>hata</sub>지 않았으니까 (熊谷 1997)  
 (秘密を) (し なかつたので)
- (例6) 「**흔**리<sub>hata</sub>落<sub>hata</sub>と<sub>hata</sub>される」하는 사람 (した人) (熊谷 1997)
- (例7) 「**마**ど<sub>hata</sub>ま<sub>hata</sub>ら<sub>hata</sub>ない」한 것 (したもの) (熊谷 1997)
- (例8) **문**章<sub>hata</sub>보다도 **물**ち<sub>hata</sub>着<sub>hata</sub>き<sub>hata</sub>払<sub>hata</sub>った<sub>hata</sub>家<sub>hata</sub>庭<sub>hata</sub>에 즐거움 (熊谷 1997)  
 (よりも) (の 喜び)
- (例9) 흠, 마누라가 살아 있을 때 아무 것도 못해 주고 이제 **아**와<sub>hata</sub>て<sub>hata</sub>た<sub>hata</sub>って<sub>hata</sub>な<sub>hata</sub>ん<sub>hata</sub>に<sub>hata</sub>なる<sub>hata</sub>か? (熊谷 1997)  
 (フン、嫁が生きている とき なにもしてやれんで今になって)

「hata」の用法は、例文1～7のように、日本語動詞を転移使用させつつも、テンス、アスペクト、ヴォイスなどの文法的諸機能を「hata」の朝鮮語部分に担わせるものである。また、日本語動詞が受身形(例6)、否定形(例7)をとったまま、「hata」を後続させて用いられる例も見られる。さらに、句単位での転移使用例(例8)も見られ、日本語文全体が朝鮮語の中に転移使用されること(例9)までであった。このことは、話などの相手は、当然同じレベルのバイリンガルであることを前提にしていることは言うまでもないとのことである。

例文7からは「まどまらない」が実際には「まどまらない」として発音されていることがわかる。さらに、熊谷(1997)では、『内鮮労働用語集』という小冊子を紹介しているが、この小冊子は労働用語の日本語に朝鮮語の訳文がついた文献である。その朝鮮語の訳文に日本語からの音借語が用いられている文は2例あった。例文10では、「勘定」を「カンジョ」と表記されており、日本語の発音を正確に表記しようとする意識まではなかったようである。また、例文11では、日本語用言「ごまかす」を、「連用形+hata」に訳されている。

(例10) 此ノ勘定ハ間違ツテ居マス (O| カンジョ)= 틀림니다) (熊谷1997)

(この 勘定は 間違っています)

(例11) 仕事ヲ胡魔化ス様デハ信用ハナイ (일음 ゴマカシ해서= 신용이 없다) (熊谷1997)

(仕事をごまかすようでは信用はない)

一方、熊谷(1997)では、「韓国語+する」の形式は見られなかった。これは、「する」の活用を十分習得できず、テンス・アスペクト・モダリティを表現できるレベルまで達していないという日本語能力の現象を反映していると思われる。

## 32 在日コリアン

在日コリアンの研究は、生越(1983)、任(1993)をはじめ、現在まで盛んに行われてきた。特に、日本の少数民族におけるバイリンガリズムとして代表的に扱われてきた。

在日コリアンは植民地時代前後に来日し、自分たちのコミュニティが形成され、在日2,3,4世まで続いてきた。彼らは主に、このコミュニティ内での言語生活を営んできたため、独特な混淆形式を生み出している。

### 3.2.1 在日コリアンのバイリンガリズム

在日コリアンの言語行動を調べた研究は、北朝鮮の総聯系(以下、「朝鮮人」あるいは「総聯系」と表記する)と韓国系コリアンの研究に分かれる。しかしここでは、在日コリアン1世と2世以降の言語行動により注目したいので、この2つを分けずに考察することにする。

まず、在日コリアンのバイリンガリズム研究は、いずれも、状況によって日本語と韓国

語（あるいは朝鮮語）のどちらの言語を使用するかに注目していた。例えば、生越（1983）では、民族学校（建国学校）に通わせている家庭のインフォーマントほど家庭内で韓国語（朝鮮語）を使う割合が高かった。さらに、生越（2003）では、民族学校（建国学校）の生徒またその親のうち、日本で生まれた場合は、韓国語能力の低下が著しく、韓国語使用も少ないことがわかった。このことは、在日2世以降は日本語モノリンガルに近くなりつつあることを意味する。

在日コリアン1世は、コリアン同士のコミュニティをなして暮らしている場合が多い。黄（1994）の記述によれば、彼らのコミュニティは、地域的な集住という可視的な形の他に、いわゆる密集地域ではないが、人のつながりだけに頼って形成されているコミュニティも存在する。集住の歴史は渡日の初期から続いており、1世の持つ特殊な歴史・社会的な背景の産物であるコリアンコミュニティの存在は、1世の日本語習得に深く関わっている。1世の大多数は学校での教育など明示的な形での日本語学習経験がなく、耳だけに頼って日本語を習得してきたものと考えられる。そのため1世の日本語は、日本語母語話者には不自然な響きを与える場合が多いが、そうした言語を用いて、1世たちの間で互いに影響を及ぼしながら意思疎通を行っている。

これに対し、申（2001）では、総聯系2世以降の在日コリアンのバイリンガルを対象として研究を行っており、20代の総聯系の在日コリアン2世以降は、家庭の中で両親に向かっては89%が日本語を使用するが、学校の先生には94%が朝鮮語であった。また、友人との会話の場合、学内では68%が朝鮮語で、20%が日本語であるが、学外では93%が日本語で会話していると報告し、日本語が学校言語として定着していることが伺える。

生越（2003）と申（2001）のような民族学校に通っている2世以降に共通するのは、私的な場面での日本語使用率が高くなっている点である。他方、日本の学校に通う生徒は、日本語のモノリンガル化しつつある。

### 3.2.2 在日コリアンのコード・スイッチング

在日コリアン1世と2世以降のバイリンガリズムの差は、CSの実態にも反映されている。まず、在日コリアン1世を対象としたCS研究には、金（1994）、金（1998、2001）、黄（1994）などがある。これらの研究では、在日1世のCSの特徴として、「韓国語＋する」、「日本語＋hata」という混淆形式を報告している。また、黄（1994）は在日韓国人1世とその孫（在日3世、29歳）との会話から、世代差を調査した。祖母には単語レベル（47%）、句・節レベル（43%）、文レベル（10%）においてさまざまな切り替えが見られた一方、日本生まれの孫には、名詞レベル（94%）の切り替えがほとんどであり、しかも親族名が多いことがわかった。これらの研究に例示されたCSを再検討してみよう。

(例 12) ひでよし、질서야 / 빨래する / 식사する (金 1994)  
(お辞儀) (洗濯) (食事)

(例 13) 短大 卒業하는대 / どろどろ한 ケーキ (黄 1994)  
(するけど) (した)

(例 14) 우리 할머니가 막 嚴しい하、막 嚴しい하고 (金 2001)  
(うちのお祖母さんがすごく嚴しいの、すごく嚴しくて)

(例 15) 가방 같이 さげる해서 / かかる해서。 (金 1994)  
(かばんのように) (して) (して)

(例 16)はじめ 천이십원만 払い 하면 (金 2001)  
(千 20 ウォンだけ 払うなら)

(例 17) 병원에 가するね / 가した / 닦아する / 봐するね (金 1994)  
(病院に行くね / 行った / 磨きをする / 見るね)

(例 18) 장군 뿔ちゃあかん。 (金 2003)  
(その手を使ったらだめだ)

これらの例より、在日コリアン 1 世の間では韓国語に日本語の補助動詞「する」が結合した形式 (例 12、17) と、日本語に韓国語の補助動詞「hata」が結合した形式 (例 13～16) があることがわかる。

名詞・副詞の場合は、補助動詞の「する」(例 12) あるいは「hata」が結合 (例 13) し、韓国語・日本語の動詞化する形式に従っている。

しかし、用言の場合は 2 つのパターンが見られる。一つは、「嚴しい+hata」「さげる+hata」「かかる+hata」のように、「日本語用言の基本形+hata」の形式と、もう一つは、「払い+hata」のような「連用形+hata (する)」と、「가 (ka) +する」「닦아 (takka) +する」「봐 (pwa) +する」のような「韓国語の아/어 (a/e) 活用形<sup>3</sup>+する」の形式がある。

前者は、先行する用言の基本形を借用語として扱い、「hata」あるいは「する」をつけて用言化する。これは、英語などの外来語を借用する時も見られる形式であり、日本語と韓国語はこの点で似ている (例えば、「cross する」「cross-hata」)。

後者は、日・韓両言語の「動詞+動詞」複合動詞の作り方と類似し、ここから生産された形式であると思われる。日本語の場合、先行する動詞 (以下、「前項」と記述する) の連用形にし、それに後続する動詞 (以下、「後項」と記述する) をつける (例えば、「切り替える」)。同様に、韓国語は、「活用語幹+活用語尾 a/e」に後項をつける (例えば、「뛰

<sup>3</sup> 「a/e 型語尾」は、大体日本語の連用形に当たる。例えば、基本形の 뛰다 (ttwi-ta: 走る) は 뛰어가다 (ttwi-ka-ta 走っていく) / 뛰다니다 (ttwi-ta-ni-ta: 走り回る) のような複合動詞になる。

어가다 (ttwi-e-ka-ta)」「뛰어다니다 (ttwi-e-ta-ni-ta)」。ただし、日本語では、連用形は名詞化の働きをもつが、韓国語では後続動詞との連結語尾としての働きをもち、かつ、普通体の命令形に当たる活用形としても機能する点で、両言語は異なっている。

さらに、例文 18 は、「hata の語幹+過去形の形態素」の「-hays-」の語形に「ちゃあかん」が後続し、韓国語の「過去活用形 (-ss)」と日本語の助詞「て」が結合した形式になっている。この形式は、「基本形」「a/e 活用形」とも異なっており、テンスと語末語尾の間に切り替えが行われる形態素レベルの複雑な混淆形式をとっている。

このような混淆形式を違和感なく使えるということは、二つの言語形式をあまり区別していないことを意味する。そのため、以下のような非文法的な日本語を生産しがちである。

(例 19) 済州道で お金 決めして きた わけや (金 1998)

(例 20) 民団は 入って 踊りするし (金 1998)

つまり、在日 1 世は、日韓の両言語を同じ言語形式であると捉え、これを応用し、「する」あるいは「hata」を使い、さまざまな複合動詞を作るのである。特に、複合動詞の後項の「する」「hata」のどちらでも、テンス・アスペクト・モダリティを表現できており、この間を切り替えることはなかった。

次に、在日 2 世以降の CS を見てみよう。申 (2001) の CS 研究には、総联系の 2 世以降 (朝鮮大学の大学生) を対象とし、二言語による CS を収集した。ここにも、例文 20 のように「遊び+hata」の形式が見られる。しかし、例文 22~23 では、韓国語述語の「이다 (i-ta) <sup>4</sup>」か「되다 (toy-ta) <sup>5</sup>」にモダリティを補うため日本語の終助詞が追加されている。さらに、例文 24~25 では、名詞と助詞の間で切り替えられている。

(例 21) 明日、日曜日인데 どこか 行って 遊び하자. (申 2001)

(なので) (しよう)

(例 22) 그러나 그 사람들도 마ニアック이다よね? (申 2001)

(しかし、その人たちも) (だ)

(例 23) 커뮤니케이션하는 방법이 어렵게 되는가나 라고 생각했다. (申 2001)

(する方法が難しくなるのかなと思った)

(例 24) 학교 に 선생님 おるかなあ? (申 2001)

(学校) (先生)

<sup>4</sup> 「이다(i-ta)」は述語形助詞で、日本語の「だ」にあたる。

<sup>5</sup> 「되다(toy-ta)」は動詞で、日本語の「なる」にあたる。

(例 25) 시험의準備があるから今日は기숙사에 남겠다. (申 2001)  
(試験) (寄宿舎) (残る)

申 (2001) の研究での在日 2 世以降の大学生は、いわゆる均衡バイリンガルとして十分な二言語能力を持ち、それによって自由に切り替えを行う。しかし、韓国語用言を用いる場合は、感情的な表現に不十分さを感じ、日本語の終助詞を追加し、より正確なコミュニケーションをとろうとする意識が見られる。

### 3.3 滞日韓国人留学生

ここでいう「韓国人留学生」とは、近年留学の目的で、臨界期が過ぎた時期に来日し、日本の大学に在学している韓国人留学生のことを指す。留学生は臨界期が過ぎてから第二言語として日本語を学習するいわゆる日本語学習者であり、目標言語の現地での日本語学習者として位置づけられる。

留学生のバイリンガリズムは、日韓間のバイリンガルとして扱うより、日本語学習者として日韓対照研究、中間言語の研究対象として多く研究されてきた (迫田 1998 など)。

#### 3.3.1 滞日韓国人留学生のバイリンガリズム

韓国語話者日本語学習者は、佐治・真田 (2004) は、韓国人話者は「直訳ぐせ」におちいる危険があり、両言語の違いに目を向けなければ、日本語らしい発想の表現もなかなか身につかない、という当たり前の事実を見過ごしている学習者が多い、と指摘した。

日本語学習者として留学生の誤用研究は、多く研究されている。ここでは、「hata」と「する」に関する誤用を見てみよう。

(例 26) 今日の試験はとても簡単しました。 (佐治・真田 2004)

(例 27) その人は韓国で有名した人です。 (佐治・真田 2004)

このような誤用は、韓国語における動詞と形容詞の形態上の類似から来る誤用の代表的なものであり、「漢字語+する」の動詞と「漢字語+だ」の形容動詞の混同である。「する」にあたる「hata」は、漢字語や擬音語・擬態語と組み合わせさせてたくさんの動詞を派生させるが、同時に日本語の漢語系形容動詞に相当する語もこの hata によって作られる。そこで、この hata を「する」と直訳することからくる誤用が生じる。

また、「ねばねばする」「ぱさぱさする」といった「擬態語+する」がすべて韓国語では、形容詞扱いであるので、「堂々とする」のように「する」でも「だ」でもない派生語尾「とる」になる場合など、韓国語話者を混乱させる要因は多い。このような誤用分析の研究からわかるように、留学生は、母語の影響が強く、母語の転移が起きやすい。

しかし、滞日韓国人留学生は日本人と接触、インターアクションを常に行っているため、在日1世に比べ、日本語に対する規範意識が高い。また、在日コリアン2世以降に比べると日本語ネイティブのような能力を持っていないため、中間言語がたびたび観察される。その一方では、気を許せる韓国人留学生同士での話では、韓国語を主に使い、自分たちの言語行動をもっている。しかし、滞日韓国人留学生同士のつながりは、他大学への進学、帰国などの理由で長期間維持できず、コミュニティ形成まではいたらない。

### 3.3.2 滞日韓国人留学生のコード・スイッチング

韓国人留学生同士の会話におけるCSに注目した研究は、郭(2002)がある。郭(2002)では、平均滞日期間7年の韓国人留学生6人の会話から、CSの例を提示した。

- (例28) 우리 **頑張る하자**. (郭2002)  
(私達 頑張ろう)
- (例29) 막 **怒る하고**, 家賃도 못 내고 난리 냈잖아. (郭2002)  
(すごく怒って家賃も出せなくて大変だったの)
- (例30) 하긴 **面倒하지만** 어쩔 수 없지. (郭2002)  
(本当に面倒だけれどもどうしようもないでしょう)
- (例31) 도둑이 든 것 같아서 바로 **通報했다**. (郭2002)  
(泥棒に入られたみたいですぐに通報したんだって)
- (例32) 설명이 엄청 **ややこしい했어**. (郭2002)  
(説明がとってもややこしかったの)
- (例33) 너무 **格好悪い하잖아**. (郭2002)  
(あまりにも格好悪いでしょう)
- (例34) 나 그때 **うとうと하고** 있었거든. (郭2002)  
(私その時 うとうとしてたのね)
- (例35) **ゆったり해** 버리니까 공부가 안 되지. (郭2002)  
(ゆったりしてしまうから勉強にならないでしょう)

これらの例はいずれも「日本語+hata」の混淆形式である。これらの留学生の複合動詞の生産形式は、活用しない名詞・副詞はもちろん、用言の場合も基本形だけが出現している。活用はもっぱら後項の「hata」を用いる。

基本形式に「hata」を結合させる複合形式は、在日コリアンのCS形式の2つのパターンのうち、「基本形+hata」の形式しか見られなかった。これは、熊谷(1997)の植民地

時代の CS パターンに似ている。すなわち、植民地時代・滞日韓国人留学生の CS は、韓国語を基盤とし、単語レベルの日本語の名詞・動詞などを借用する形式をとっていた。しかし、彼らは平均7年も滞日し、日本語の前項部分を「hata」で動詞化しなくても、日本語の活用を操る言語能力は十分持っているはずである。にもかかわらず、基盤言語が韓国語の場合の日本語動詞の基本形の借用は、彼らにとって違和感のない、頻繁に使う現象なのである。

また、韓国人留学生は、母語が完全に確立しているため、留学生同士の会話では韓国語が主に使われるが、互いの共感を高めるために、日本語を借用語として取り入れることがあると考えられる。

### 3.4 滞日韓国人中高生

近年、韓国人ニューカマーは年々増えつつあり、家族ぐるみの来日ケースも少なくない。それに伴い、子供たちの日本語教育問題と、さらに韓国語保持の問題が生じる。ここでは、韓国系民族学校<sup>6</sup>に通う中高生を対象とし、彼らの来日時期・滞日期間による日本語・韓国語間のバイリンガリズムおよび CS の特徴を考察する。

#### 3.4.1 滞日韓国人中高生のバイリンガリズム

滞日韓国人中高生を対象とした研究には、朴（2003a）、吉田（2004）がある。

朴（2003a）は、滞日韓国人中高生は、滞日期間が長くなるにつれ、日本語能力が発達する一方、韓国語能力は、滞日期間が10年以上になると、低下するか十分習得してない状況が続くことを明らかにした。中島他（2001）は、日本の公立に在学する外国人小・中学生を対象とし、入国時期の年齢に関し10歳を隔たりとし、それに満たない時期に入国した場合は、母語維持能力が弱いことを報告した。これに比べ、朴（2003a）の「東京韓国学校」の中高生は、韓国教育センターの教育方針により、韓国維持能力が高く維持されている。

朴（2003a、2003b）では、二言語による言語行動の一面として「友達ネットワーク」<sup>7</sup>を提案している。朴（2003a、2003b）によれば、学校内の友達ネットワークでは、言語能力が似ている友達同士のネットワークを形成し、日本語優勢の友達ネットワークで使われる言語は日本語、韓国語優勢の友達ネットワークで使われる言語は韓国語であった。また、どちらの言語の能力も優れている「均衡バイリンガル」とどちらの言語も低迷して

<sup>6</sup> 韓国系民族学校は、「東京韓国学校（東京）」、「建国学校（大阪）」、「金剛学園（大阪）」、「京都韓国学園（京都）」の4校がある。朴（2003a、2003b）は「東京韓国学校」の中高生を対象とし、吉田（2004）は、これらのうち3つの学校の中高生を対象とし、調査したデータである。

<sup>7</sup> 「友達ネットワーク」とは、クラス全員の「一番親しい友達（2名）」とのつながりを図式化したものである。

いる「セミリンガル」は、二言語による言語行動をとっていた。しかし、「均衡バイリンガル」の場合は、相手に合わせて言語を変えるのに対し、「セミリンガル」は言語能力が不足しているために二言語が用いられることが明らかになった。

### 3.4.2 滞日韓国人中高生のコード・スイッチング

ここでは、朴 (2003a)<sup>8</sup>と吉田 (2004)<sup>9</sup>の例文を検討することにする。

- (例 34) 曖昧って韓国語、**우리말이에요**? (朴 2003a—滞日期間 3 年)  
(我が国の言葉ですか)
- (例 35) 선생님한테도 **相談해** 봐야지. (吉田 2004—滞日期間 4 年)  
(先生にも) (しないと)
- (例 36) 아니야 그렇게 **追いかけて**<sup>10</sup> 아니죠! (朴 2003a—滞日期間 9 年)  
(いや、そんなに) (じゃないんですよ。)
- (例 37) **육식위주의** 食事って書く. (朴 2003a—滞日期間 9 年)  
(肉食中心の)
- (例 38) 그러니까 **意味가** 모르니봐요. (朴 2003a—滞日期間 10 年)  
(だから) (分からないみたいです。)
- (例 39) 네, **자기소개서**ってお父さんに見せる? (吉田 2004—滞日期間 13 年)  
(自己紹介書)
- (例 40) **하긴**,それは、ちょっと、そうだけど. (吉田 2004—日本生まれ)  
(そりゃ)

例文 34 では、「日本語名詞+韓国語用言」を避けるため、「韓国語」と「우리말(wu-li-mal)」を重ねて発話している。これは、滞日期間が比較的に短いため、wu-li-mal を「韓国語」と呼ぶのに違和感を感じ、述語全体を切り替えたと思われる。このことから、韓国語の規範意識に反する CS を避けようとする意識がうかがえる。例文 35～39 は、名詞の切り替えの例であるが、滞日期間によって CS 形式に差が見られる。まず、滞日期間が 4 年の生徒の場合、「名詞+hata」の形式が用いられ、韓国語を基盤に日本語名詞を借用している。例文 36 は、「追いかけて」と助詞の間に切り替えを行うが、例文 37～38 では、切り替える

<sup>8</sup> 筆者は塾で滞日韓国人中高生に「国語(韓国語)」を教えている。授業の一部を録音したデータとインタビューデータから CS 例を提示した。

<sup>9</sup> 来日時期が似ている友達同士の会話を録音したデータの例を提示した。

<sup>10</sup> 「追っかけ」の誤用。

単位を「名詞+助詞」にし、より強い規範意識が働いているとみなされる。さらに、例文 39 のような引用形式の切り替えと、例文 40 のような感動詞の切り替えは、文全体の影響力が弱く、独立しているため、文の構成には CS による乱れはあまりない。

このように滞日期間によって、CS の形式には差がみとめられる。吉田 (2004) は、韓国系民族学校の高校生の間では、来日時期が早くなるに従って、韓国語の発話に日本語の要素を挿入するタイプの CS から、韓国語と日本語を発話内で交互に切り替えるタイプの CS に移行する傾向があるとし、滞日期間が CS の形式に深く関連していることを明らかにした。

滞日韓国人中高生における CS では、在日 1 世・留学生に見られる「日本語動詞+hata」の混用形式は見られなかった。これは、滞日韓国人中高生の場合、日本語ネイティブ並みの生徒と日常的に接しているため、正しい日本語を身につけようとする意識が強いからであると思われる。

#### 4. 考察

第 3 節では、日韓間のバイリンガリズムについて、「植民地時代」「在日コリアン」「滞日韓国人留学生」「滞日韓国人中高生」に分け、それぞれの二言語による言語行動および CS 形式の考察を行った。特に、混淆形式のうち、日韓の名詞・動詞に「hata」あるいは「する」を後続する複合動詞の出現に注目し、これにはコミュニティという社会的な要因と、言語形式による言語内的要因がかかわっていることがわかった。

ここでは、「植民地時代」「在日コリアン 1 世」「在日コリアン 2 世以降」「滞日韓国人留学生」「滞日韓国人中高生」に分け、複合動詞の混淆形式の CS だけを取り上げ、次の表 1 に示した。表 1 での「基本形」と「連用形」とは、日本語の場合は、動詞の基本形と連用

[表 1] 「hata」と「する」による複合動詞の CS 形式

		植民地時代 (熊谷)	在日 1 世 (金など)	在日 2 世以降 (申)	留学生 (郭)	中高生 (吉田 <sup>11</sup> )		
						K 優勢	均衡バイ	J 優勢
韓国語 基盤	(日)名詞+hata	○	○	○	○	○	×	×
	(日)連用形+hata	○?	○	○	○?	×	×	×
	(日)基本形+hata	○	○	○?	○	×	×	×
日本語 基盤	(韓)名詞+する	×	○	○	○	×	×	×
	(韓)連用形+する	×	○	×	×	×	×	×
	(韓)基本形+する	×	×	×	×	×	×	×

\* 「?」は、先行研究に例示されていないが、予想される形式を意味する。

<sup>11</sup> 吉田 (2004) を参考し、臨界期 (9 歳) 以後来日した場合を「韓国語優勢」、臨界期以前来日した場合を「均衡バイリンガル」、日本生まれを「日本語優勢」と表記した。

形を、韓国語の場合は、基本形と「a/e活用形」をそれぞれ意味する。

表1により、複合動詞の混淆形式が一番多く見られるのは、在日コリアン1世で、滞日韓国人中高生の均衡バイリンガル、日本生まれに近い日本語優勢の生徒には、まったくこのような形式が見られなかった。また、植民地時代の場合は、言語能力不足により、日本語を基盤とするCSはあまり行われていないと予想される。

在日コリアン2世以降（朝鮮大学校の大学生）・滞日韓国人留学生と、滞日期間が短い韓国語優勢の生徒の場合は、両言語あるいは一方の言語を習得する過程にあるため、その中間言語が頻繁に観察される点で共通している。しかし、前二者と後者は、韓国語を基盤とするコードにおいて、混淆形式を許容できるかどうかで異なっている。すなわち、在日コリアン2世以降と滞日韓国人留学生のコードには、名詞・動詞ともに混淆形式が見られる一方、韓国語優勢の中高生のコードには、名詞を借用語とした混淆形式しか見られない。これは、滞日韓国人中学生の場合、ネイティブ並みの言語能力をもつ生徒と日常的に接触しているため、それぞれの言語の規範意識に反する混淆形式が許容されないと推測される。ただし、「日本語の漢語名詞+hata」は、滞日韓国人中高生の生徒にとって、違和感のある言い方ではないようで例文35のような例が見られる。

しかし、日本語を基盤とした「韓国語動詞の基本形+する」の形式は、先行研究からもまったくその例が見られなかった。その理由として、韓国語では、基本形を日常生活で使うことがまったくないことがあげられる。韓国語の動詞の基本形は、活用できる原形を示す語形である。つまり、会話で使われない韓国語動詞の基本形は、混淆形式を生産することが不可能であるが、会話で使われる「a/e活用形」の場合は、コミュニティ内で許容されることを条件として、さまざまな混淆形式を生産することが可能になるのである。このことから、在日コリアン1世に独特な「a/e活用形+する」は、「a/e活用形」が連結語尾また命令形として会話で頻繁に使われることに起因するパターンである一方、「する」を用いて、日常生活を多く使うことは植民地時代と大別できる。

以上、本稿では先行研究の日韓間のCS形式を再分析し、日韓間のバイリンガリズムを4つに分け、考察を行った。その結果、日韓の混淆形式には、コミュニティ内の許容性および語形の使用可能性など、社会的な要因と言語内的要因が関わっていることを明らかにした。

## 5. 今後の課題

日本語・韓国語間のCS形式は、語順が似ているため形態素別に切り替えられ、そのパターンも複雑である。このように、複雑なパターンを見せるCS形式の分析には、より多くのCSデータが必要である。この点においては、今後の課題にしておきたい。

<参考文献>

- 生越直樹 (1983) 「在日朝鮮人の言語生活」『言語生活』376 筑摩書房
- 生越直樹 (2003) 「使用者の属性から見る言語の使い分け—在日コリアンの場合」『月刊言語』32-6 大修館書店
- 任榮哲 (1993) 『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』くろしお出版
- 郭銀心 (2002) 「韓国の帰国子女の日本語と韓国語間のコード・スイッチングの形態」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』社会言語科学会
- 金静子 (1994) 「일본 내의 한/일어 언어 병용화자(한국인)의 Code-Switching 에 대하여」『二重言語学会誌』11 이중언어학회
- 金美善 (1998) 「在日コリアン一世の日本語」『日本語学報』17 大阪大学文学部
- 金美善 (2001) 「大阪生野区周辺の在日コリアン一世の混用コード」『社会言語科学会第8回研究大会予稿集』社会言語科学会
- 金美善 (2003) 「混じり合う言葉—在日コリアン一世の混用コードについて」『月刊言語』32-6 大修館書店
- 熊谷明泰 (1997) 「朝鮮語ナショナリズムと日本語」『ライブラリ相関社会科学4—言語・国家、そして権力』新世社
- 佐治圭三・真田信治 監修 (2004) 『日本語教師養成シリーズ2 言語一般』東京法令出版
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究—日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社
- 申昌洙 (2001) 「総聯系在日コリアン2世以降の世代の言語意識と言葉の使い分け」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』社会言語科学会
- 中島和子/ロザン・ヌナス (2001) 「日本の小・中学校のポルトガル語話者の実態を踏まえて」<http://www.colorado.edu/ealld/atj/SIG/heritage/nakajima.html>
- 朴良順 (2003a) 『滞日韓国人中高生における言語行動』東京都立大学修士論文 (未公刊)
- 朴良順 (2003b) 「滞日韓国人年少者における交友ネットワーク」『社会言語科学会第11回大会予稿集』社会言語科学会
- 黄鎮杰 (1994) 「在日韓国人の言語行動—コード切り替えに見られる言語体系と言語運用—」『日本学報』13 大阪大学文学部
- 吉田さち (2004) 「在日コリアン高校生の二言語併用—来日時期とコード・スイッチングの相関を中心として—」『社会言語科学会第14回大会予稿集』社会言語科学会

(ぱく やんすん・東京都立大学大学院生)